



# 翠巒歌碑建立

## 校舎移転五〇周年記念事業



上和田町の校舎から乗附の現在の校舎に移転して半世紀が経過致しました。移転当時に在学しておりました先輩諸兄有志が、移転五〇周年を記念して、応援歌として又一時は校歌として歌い継がれております翠巒の歌碑を建立、平成元年五月二〇日に、歌碑の除幕式が盛大に挙行されました。

本校は明治三〇年（一八九七）に創立され、群馬県尋常中学校群馬分校として赤坂町の長松寺本堂を仮校舎としてスタート、翌年の明治三一年（一八九八）上和田町に二階建校舎が落成しここに移転しました。その当時に在学しておりました三八期から四二期迄の諸兄が昭和一三年二月二八日、浅間下ろしの吹きすさぶ中を乗附の新校舎へ机を担ぎ、校具を担いで移転してから、昨年で丁度五〇年の歳月が過ぎ去りました。

激動の半世紀の流れの中で多くの先輩諸兄が大戦の嵐の犠牲となり、又日本の再建に最大の努力をした年代の先輩方の

当時の在校生有志が、移転五〇周年を機会に、記念に何かを残そうと、昨年の暮れに中学校舎移転五〇周年記念行事委員会が、三八期の重田精一氏を委員長に組織され発足致しました。そしてこの度、翠巒歌碑の建立が決まり、その除幕式が行なわれた次第です。

除幕式は五月二〇日の午後挙行され、先輩多数が列席されて、喜美侯部啓吾氏（四一期）の司会で始まり、小山禮一氏（四二期）の挨拶があり、各期代表の立ち会いで除幕式を行い、記念行事委員長の重田氏より、歌碑建立までの経過報告がありました。柴山同窓会長、学校長の祝辞の後、永井石材店主、中曾根信雄氏（三九期・画家）に感謝状の贈呈があり、参会者全員で高らかに校歌と応援歌翠巒の大合唱を行い応援部がエールをおくり、閉会となりました。

建立されました翠巒歌碑は横約三メートル、高さ約二メートルの三波石の表裏に御影石を嵌め込み、表には「翠巒」の一番の歌詞が刻まれ、その周りには先輩画家の中曾根信雄氏の筆で、榛名の山河が描かれており、裏面には、次のような建立の趣旨が書かれてあります。

母校群馬県立高崎高等学  
校は昭和一三年一二月上和田  
台台上の旧校舎よりこの地  
に移転 当時の在校生は寒  
風の中、机などを運び移転  
作業に従事 昭和一四年一  
月より新しい学舎での生活  
が始まる

以来星霜うつり 五〇年  
の歳月を経過し 昭和六十  
四年 時あたかも昭和の終  
焉となり 新しい平成の年  
を迎え 移転当時の在校生  
相集い相計りて 汗と涙の  
青春 血潮ぞたぎる若き日  
の思いを偲びつつこれを建  
つ

- 平成元年五月二〇日
- 第三八回
- 第三九回
- 第四〇回 卒業生有志一同
- 第四一回
- 第四二回

と記されております。昭和一四年から昭和一八年に卒業の諸先輩は太平洋戦争の真只中、その青春の血潮をたぎらせ、戦争に明け暮れし、尊い若い生命を捧げた人もたくさんおられました。

移転当時から現在まで残っている建物は、講堂だけになってしまいました。その他は、校門から続いている銀杏並木が上和田校舎の正門前から移植したものだそうです。

翠巒の記念碑は講堂の前の3Fの池の横の校舎の間に建立されました。御来校の折には是非ご覧下さい。

（事務局・富田裕二・四九回）

# 私と柔道

## 県体協のこと

県体育協会名誉会長

### 羽鳥治郎松



翠巒体育会という名の何と懐しい名でありましょう。私は高々同窓生である事を生活の誇りに思っております。又、恩師・先輩・後輩の方々の各界各層にわたる活躍の跡や現況を思う時、感謝と誇りで一杯です。

尚又、翠巒体育会報の各号を通覧します時、役員の皆様の御活躍に心から敬意を表します。更に、歴代の同窓会長さんの御功績や母校愛に対して心から感謝致します。

さて、私の柔道歴・スポーツ歴の一端を申し上げます。昭和六年卒業までの高中の五年間は柔道に明け暮れたようなものでした。修練はきびしくて苦しい毎日でしたが、後で思い出せば之が私の人生に色々と為になり、力になりました。もともと勉強の方は、後から追いつき追い越せの苦労の五年間だったような気がします。

私は修業の初めから「基本を忠実に学ぶ」事、「他の人よりも二倍も三倍も練習する」ような気持で修練しました。何せ身長は四尺八寸五分(約一四七cm)、体重は十五貫(約五kg)で、同級生でもビリから二番目のチビでした。だから大男ぞろいの選手の中で大変苦労しました。

特に努力したのは、「負けて考え」「勝つて考え」「人の技を見て考え」る事でした。「どこが良かったか」「どこが悪かったか」を考え、自分の不利な点・欠点を見出し、直すように心がけました。又、「人の良い点」を学ぶようにしました。之は自分が小さくて非力だったからだと思います。

こんな風に修業していた四年生の時、ひどいスランプに落ち込んだことがあります。それまで連戦連勝だった技がさっぱりかからなくなってしまうのです。その時田中良三先生は、「じっと我慢して、

納得いくまで修練し頑張れ」と励ましてくれました。その言葉に従って修練し、もかかりました。私は、この時、どんな苦しい時もじっと我慢をすれば道がひらけると、我慢をする事を覚えたようです。そして、この四年の努力は目をみはるように花が咲きました。之も修業の御蔭ですが、あくまで本人は電我夢中でやったことです。

もう一つ忘れられない事があります。五年の時でしたが、田中先生につれられて夏休みの三週間くらい、東京高師で修業させて頂きました。当時日本一の永岡秀一先生と高師の教授の大先生を始め、日本中から集った秀才達との合同練習と講習でした。便所へ入っても腰が立たないくらいに難行苦行で、之には全くまいりました。後々まで身にしみて薬になりました。御蔭様で自惚れてはいけなさと悟り、「謙虚」であることを学びました。上には上があるものと知りました。これは人生の教訓でした。

社会人となつての東京時代、強い人になほめられましたが、実は強さより技のきれがよかつたのだと思います。技のきれについては自他共に認めるようになりました。

しかし強敵はどこにいるかわかりません。実はバスケットの清水貞保先生は同級生だが「羽鳥君を一回投げたのは俺だけだよ」と同窓会で顔を合わせると言われます。これには頭が上がりません。懐しい同級生です。

山口正三郎君とは机が隣の同級生なので、今なお時々チャチャを入れられます。昔の事を知っているのです、之又頭が上がりません。弓道やボートで県体協でも活躍されました。

ところで、社会人としてのスタートは郵政省簡易保険局です。ここに柔道部が開設され三百余人の中から三人の助教が選ばれました。ここでも天下一流の半田義磨呂先生・永岡秀一先生直々の御指導を賜ったことは生涯の良い経験でした。

### 事業報告

昭和63年 10・6 (PM六・三〇)

「翠巒体育会」63年度総会 (ビューホテル)

12・20 校内マラソン表彰式 (トロフィー授与)

平成元年 6・6 (PM六・三〇)

役員会

6・22 (PM六・三〇)

役員会(理事会)ビューホテル

6・27 (PM六・三〇)

編集会議(佐田建設)

10・16 (PM六・三〇)

編集会議(佐田建設)

11・1 (PM六・三〇)

編集会議(佐田建設)

11・13 (PM六・三〇)

編集会議(佐田建設)

12・5 (PM六・〇〇)

役員会(理事会) 翠巒会館

この時代、柔道と苦学の両立時代の難行苦行をやり通せたのも柔道で鍛えた頑張り精神と体力だったと思います。勤めと苦学と柔道と、二本も四本も重ね合せた八年間の東京時代を頑張り通せたのは一重に柔道の御蔭です。

昭和十四年に理研に再就職し、前橋の軍需工場に勤めました。戦争の後半には人員も一万人とふくれ上がり、国家総動員法により雑多な人間が増えて来ました。工場長の委嘱を受けて訓練のため、ここでも又柔道場を開設しました。業務と訓練と二重苦を経験しましたが、三百人を越す人間を鍛えたのも良い経験でした。

戦後GHQの武道差止めのため一時期休みました。この間理研を去り、現在の会社をおこしました。創業十五年を経た昭和三十八年石井前橋市長さんの後をうけて市の体育協会会長やら県陸協の副会長に推されました。当時県陸協の会長は中曾根康弘さん(第三十六回)で総理大臣になるまで就任されていきました。

県の体育協会に関係するようになったのは、四代目県体協会長の浜名一男先生(第二十一回)の時です。浜名会長さんはあかぎ五十八国体に情熱を燃やし、大成功をおさめました。私は副会長として補佐しました。五代目関口会長の後をうけて、六代目会長となり、一期二年、大過なく職務を全うし、今は名誉会長として皆さんの活躍を見守っております。

加盟競技団体が六十五という膨大な組織の県体協の運営は仲々大変です。只今は副会長に小山禎一さん(第四十一回)が迎えられ、大変心強い次第です。その

他スキー連盟の会長の山本富雄先生(第四十五回)、カヌーの橋爪和夫先生(第四十九回)、ラグビーの須永誠一さん(第三十一回)、バスケで群大教授の鈴木武文先生(第五十一回)を始め、教育行政の要として菊地俊二体育課長(第五十二回)、前任の中山尚郎さん(第四十回)、関口登さん(第四十六回)等々大勢の方々が活路されています。

各団体大勢の方々の御協力によって、私の在任中にあかぎ国体以後後退を続けていた国体の成績を上げることが出来たのは大きな喜びでした。二十位まで後退したのを、沖繩(四十一回)で十四位、京都(四十二回)で八位と上昇出来て幸運でした。

私は卒業以来母校に対して直接には何のお役にも立てなかった事を申し訳なく思っております。しかし、母校で学んだ事、特に柔道部で学び鍛えられた事がその後の美人生の大きな支えとなり、私を生かしてくれた事を有難く思っています。同時に、直接母校のためにお役に立てなかった分、後年県スポーツ界へ恩返しをするような気持ちでお手伝いさせて頂いた事を、母校高々の同窓の一員としていささか誇りに思っております。

私も今年は七十七才の喜寿の祝いをしました。皆さんから「お元気でですね、柔道の御蔭でしょう」と言われることがあります。私は「いやいや、多少はあるかもしれませんが、年に応じた健康管理のたまものですよ」と言います。「寝だめと食いだめは出来ません」、ある日思いついて何かやったって駄目です。毎日毎

日の健康管理をしっかりとやらなくては行けません。そして、いつまでもお役に立てるようにしたいと思っております。

これらの他にも、文武両道を実践している頼もしい後輩達のことなど、書き続ければきりがありませんので割愛させていただきます。

最後に、母校と同窓会並びに翠巒体育会の益々の御活躍と一層の御発展を祈念いたしまして、つたない一文を終ります。(30回・柔道部)



翠巒体育会  
会計報告

昭和63年度

会計 佐藤 義夫  
(58回・サッカー部)

会計 安中 隆一  
(65回・バレー部)

監査 丸山 功一  
(60回・応援部)

監査 廣田 誠四郎  
(64回・陸上部)

収入の部			支出の部		
項目	金額	備考	項目	金額	備考
繰越金	351,361		役員等代 印刷費	886,320	
年会費	275,000	25,000×11部	総会費	242,720	
総会費	181,000		懇親ゴルフ 大会助成金	189,030	
助成金	600,000	63年度、 平成元年度 ゴルフ会費	事務局事務費	100,000	
雑収入	135,785		理事・役員 会議費	72,674	
合計	1,543,146		合計	1,490,744	

差引残高 52,402円 (単位:円)





# 青春の絆

軟式庭球部

## 生涯スポーツになったテニス

塚越章司 (58回)

野球少年であった私がテニスに出合ったのは全くの偶然からであった。中学一年の担任が軟庭部の監督で、なかば強制的に入室させたからである。

私が入学した昭和三十一年頃の高々運動部は活気に溢れていた。野球部、ラグビー部、剣道部等は県下のトップクラスにいた。軟庭部も相原・金子組、谷口・佐藤組、小川・内藤組等がインターハイや国体に出場し活躍していた。当時高々には中庭に狭いコートが一面あつただけだった。有力な選手は高崎市営コートで練習していた。そこでも使えるコートは一面だけだった。同級生に神戸君がいて、中学時代から目立った存在であった。神戸・島田組は二年生からインターハイや関東大会に出場している。三十一年から三十三年の三年間は高々軟庭部の全盛時代だったと思つている。この頃トーナメントの第一シードはほとんど高々ペアがしめていたのである。

中学からのペアで入学した、塚越・堤組は二年の時ベスト16になり、浜松の東日本大会に出場した。この時の試合はひどいもので、ボールを打つたという記憶がないうちに負けていた。顧問の「なべさん」は浜名湖のうなぎの話も御破算にしてさっさと帰って来たのであつた。帰りの電車はなかなか高崎に着かなかつた。最終学年の団体戦はライバルの対高商戦に快勝して、個人戦とともに伊勢市で行われたインターハイに出場した。(監督は下山蔵吉先生) 団体戦は一回戦で負けたが個人戦では四回戦まで進むことができた。当時我が軟庭部は学帽をかぶつて試合をやつていた。ユニホームでそろつているのは学帽だけであつた。しかしそんなスタイルで試合をやつてるのは我が校だけであつた。その後、試合での学帽はやめたのである。三年間を通して先輩達が強かつたので比較的楽な試合はこびができたように思う。伝統校だったので相手がころんでくれたのである。

蛇足となるが、三年後弟も剣道でインターハイに出場させてもらつてゐる。

その後も峰、鴻巣、丸山、清水監督の下で六、七組の個人戦の優勝ペアを出している。しかしインターハイの団体戦出場からは見放されていたのである。もう一度インターハイの団体戦出場をと思つてコーチや応援に出かけること十数年、ついに五十七年に勝つことができたのである。私達の出場から二十四年ぶりのこ

とであつた。

この次の団体優勝は平成何年になるのであるうか。現役諸君の一層の活躍を願つている昔の少年達は、何かにつけ母校に熱い視線を送り続けているのである。私にとつてもはずみで始めたテニスが三十年以上続ける結果となり、多くの友人達を作り続けてくれている。元氣なら、あと二十年は楽しめそうな予感がしている。

## コート整備の青春

大 月 久 雄 (60回)

我がテニス部時代で、最も得意であつたのは、下積み的一年生時代であつたようだ。——何故か?——それは、私の高々テニス部三年間の中で、最も強い時期であつたからに他ならない。

神戸・島田組、塚越・堤組、佐藤・伊藤組の先輩は、団体戦において、インターハイと国体の出場権を獲得したのである。

当時のテニス部は、高崎城跡跡の市営コート(六面)を放課後の各高校が一面ずつ使用していた。高工、高商、県女、市女そして高々。放課後のベルが鳴ると同時に、自転車に乗り、一目散に市営コートへ向う。二年生、三年生が来る前に、コート整備をしなければならぬ。水を撒き、重いローラーを引き、ブラ

シをかけ、水で溶いた石灰で白線を引く。ネットを張つて出来上りだ。

こんな単純な作業を毎日続けるのだが、当然のことながら、何の躊躇もない。むしろ、他の高校よりも早く、綺麗に仕上げることに夢中になれるのだから、学生時代は良いものだ。

強いチームの持つ勢いは、レギュラーのみならず、我々下級生にも自ずと伝わってくるものである。

俺の先輩は強いという意識があるから、市営コートでも鼻が高い。同級生同志ならば、他校の連中から一目置かれて、という自惚れさえあつたような気がする。裏がえせば、その時期が最も得意であつた時期に繋がるのだから他愛無いものである。しかしスポーツにあつては、ある

種の自惚れと勢いは両者一体ではなからうか。あまり謙虚であったり、静かなチームで、強いチームを知らない。

同級生同志の仲間意識、友情、そして同じ部活の連帯感といったものも、この時期に育まれるのだと思う。

炎天下で汗まみれになる練習が技術と体力と精神をつくるという考え方に異論はないが、我々が整備したコートで練習する先輩を見て球拾いするのも、青年時代の精神を構築する一要因であることに間違いはない。

今、振り返って見て、どんな他愛無いことでも、青年の充実感、その環境の中にドップリと身を浸している時にのみ味わうことのできる貴重なものであるとつくづく思う。

ちなみに、私のテニス歴では、二年生の時に伊藤先輩（前衛）と組んで、関東大会出場が最高の成績であった。

### 国体で有終の美

大 沢 宏 海 (63回)



われわれの隣りのコートは良きライバルであり、練習内容がさすがに厳しい高商。常に多数の部員を擁しており、少数精鋭で自主性尊重のわが校とは対照的でした。

軟式テニスは、前衛と後衛の二人がペアを組んで戦うスポーツですが、三年間私の前衛、即ち「女房役」を務めてくれたのは下山（現前高教諭）です。先輩らも少しは「気骨のある連中」と見込んでくれたのでしょうか、よく面倒をみてくれましたし、われわれもそれにこたえようと無我夢中だったようです。

お陰で一年生の秋には、早くも県の大大会（高崎経大杯）に優勝するなどデビューは割と華々しく、以後関東大会、インターハイに二年連続して県代表として出場。しかも、三年夏の国体予選を勝ち抜き、秋に山口県で行われた本番ではベスト8入りを果たして「有終の美」を飾ることができました。

高々からの国体出場は先輩ペアの遠藤・鈴木組に続いて二年連続の快挙、テニスの伝統校としての高々の名声を大いに生かしたと思っています。ただ惜しむらくは、「インターハイの団体戦出場」をあと一步のところまで逃し、悲願を果たせなかったことですが、高々テニス史上のページを飾れたものと、誇りに思っています。次第です。

こうした成績が残せたのも先輩諸士の応援のたまものと考えています。OBで新任教師として教壇に立ったばかりの峰先生は、部員との練習に加わるなどフレッシュな刺激を与えてくれました。亡く

なった須藤さんをはじめ、勝保、塚越、飯塚、伊藤、島田ら諸先輩には、遠征費用の捻出など物心両面にわたり援助していただき、紙上を借りて改めてお礼を申し上げます。

また、活動がやや鈍かったOB会も「復活」。現在もサンデーテニスを楽しみ、「原稿より健康」にいそしんでいる私としては心強い限りです。今年もOB会に出席、「翠巒」を高らかにうたい、そして美酒に酔うでしょう。

最後に、軟式テニスは競技人口が上位にランクされるほどの国民的スポーツなのですが、野球、サッカーなどマスコミの味に映りがちです。マスコミに働く一人としていつも歯がゆく思っているわけですが、テレビや新聞の活用を「戦略」としてもっと積極的に取り入れるよう、関係者に今後とも働きかけていく考えです。

軟庭界にもビッグニュースはあります。来年北京で開かれるアジア大会の公開競技に軟式テニスが決まり、その次の大会では正式種目に入る可能性があります。現役諸君に新たな目標が出来たわけですから、頑張ってください。



卒業してから二十五年。「現役時代の思い出」をと、原稿の依頼があったときは、時の流れの早さに思わず圧倒され、薄らいできた記憶を思い起こしながらペンを取りました。

入学時にぎやかな部室も夏が過ぎると一年生の大半は消え、結局部全体の「戦士」は毎年十数人といったところでした。当時、高崎市内の公立高校は満足な自前のテニスコートがなく、城内の市営コート（現在は駐車場）を使って連日練習に励んでいました。

高々伝統の「少数精鋭」「文武両道」の主義、精神はテニス部とて同じ。毎年

# スポーツの絆

## 大塚敏彦 (75回)

このたび高崎高校体育会OB会より、高校時代のクラブ生活について一筆書くようにとのことで、筆をとらせて頂きます。

小生が昭和五十一年に卒業してから十三年が過ぎ、時代も昭和から平成へと移り変わってしまいました。高校時代は軟式庭球部の一員として三年間を過ごさせてもらいましたが思い出といえます、やはり多くの諸先輩、同僚、後輩と知り合う場を得られたということであると思います。現在の世の中、人と人とのつながりがうすくなり殺伐としてきたことを思うと尚一層、あの頃が懐かしく思われ、てなりません。高校時代は人間形成上、非常に大切な時期であり、その時期を多くに高崎高校という進学校でありながら自由な校風に恵まれた高校で学校生活を送ることができたことは現在の生活に多大な影響を与えています。部活を通して同じ釜の飯を喰い、試合で勝っては共に喜び、負けては共に悲しみ、その中から人を思いやることを学ぶ、これに優るものはないと思われまます。確かに現役時代には精神的幼さから、なかなか人を思いやるのが難しいものがありました。現在、医療を携わるもの一人として患者

さんの身になって診療を行う上で少なからずともプラスになっていることは確かです。受験戦争としては私の頃も同様かそれ以上であったと思われまます、近年では受験と学校生活とが分離される傾向にあり、受験最重視の風潮が強くと部活は学業の弊害であるといった感じまで見受けられる時代になってきてしまった印象さえうけます。最近、新聞でティーンエイジャーのいろいろな記事がにぎわっていますが個性がなく、個々の判断ができなくなった若い人が増えてきた感があります。現在、十代の若い人と大学で授業の他クラブ活動でもつきあいがあります。医学部という本来個性の強い人間が集まる中で六十数名の大手帯のクラブですが、年々個性的な人間が少なくなってきたており、今まで運動はおろか友達と協同してなにかをやる、さらに率先してやるといった人間(ある意味では自分さえ良ければいいといった人が多い)が少なくなってきたています。我が高崎高校の後輩に望むことは、高校時代というかけがえのない時代に多くの仲間と同じ目標に向かって精進することで、その時に理解できなくても後でプラスにできるといったそんな高校のクラブ生活をぜひ送っ

て欲しいということ。確かに運動部ですから勝ちという結果は大切です、しかし運動部である以上レギュラーがいてその陰にイレギュラーがいるということ。忘れてはならないということです。自分の活躍の陰に他の人の援助があることを忘れず、できれば人の痛みをわかれる人になって欲しいと思います。部活で知り合える人はなにもに代え難い財産なのです。

高校時代の思い出と思いましたが、最近感じるところが多く、まとまらない文章ではありますが書かせて頂きました。尚、高校時代お世話になりました諸氏に御礼申し上げます。



### 昭和63年〜平成元年 高々運動部活動状況

#### ◇軟式庭球部

#### インターハイ予選

#### (個人)

・織茂・宮田組

ベスト16

#### (団体)

・高々 1-2 高商

ベスト16

#### 新人大会

・岡部・富澤組

ベスト4

・新井・宮田組

ベスト16

#### (団体)

・高々 3-0 高北

(2回戦)

・高々 3-0 沼田

(3回戦)

・高々 2-1 高商

(4回戦)

・高々 1-2 農二

ベスト4

#### 県総体

#### (個人)

・岡部・富澤組

ベスト8

・梅田・砂賀組

ベスト16

#### (団体)

・高々 3-0 渋工

(2回戦)

・高々 2-0 富岡

(3回戦)

・高々 1-2 桐工

ベスト8

第22回水曜会西毛高校招待大会

・岡部・富澤組

優勝

全国選抜大会予選

・高々 3-0 桐工

(2回戦)

・高々 2-0 太工

(3回戦)

・高々 1-2 前商

ベスト4

#### 関東大会

・岡部・富澤組

ベスト32

・梅田・砂賀組

(2回戦)

新しい伝統

サッカー部

加藤 智貴



今年度のサッカー部の戦績を挙げますと新人大会三位、総体ベスト8、インターハイ、ベスト8、と高々サッカー部最

盛期と比べるとちよつと物足りない成績であり、ベスト8、ベスト4の壁を打ち破れないというのが現状であります。

新人戦ではひさびさに育英に勝ち準決勝に進出したわけですが、ひさしぶりのベスト4という事で、選手の間で「もう充分だ」という変な満足感が生まれてしまい、3対0という思わぬ大差で敗れてしまいました。総体でも実力では五分五分ぐらいの利根商と3対0という、思ってもみない敗戦でした。インターハイ予選も同じく準々決勝で藤岡に善戦したもののラスト五分で得点され、1対0で負けるなどどうしてもベスト4、ベスト8の壁が破れません。ここで以前の高々サッカー部と今のサッカー部ではどこが違うのかと考えると勿論技術的な事もありますが、精神的な面の違いが大きいと思います。以前の高々でしたら、他校から見れば、高々強いと思われていたと思いますがここ一、二年ではそのイメージがこわれつつあり、選手一人一人の意識もだいぶ違いがあると思います。以前の

高々でしたらベスト8、4では、いつもの事で、逆にくやしいうぐらいの気持ちであったと思います。ここから言える事は勝つ事は大切であり、そこから、伝統も生まれ、選手一人一人の自覚も生まれるという事です。

そして伝統とはすばらしいものであります。過去の栄光に居座ってはいけません。進する事はできません。ですから、今から自分達の手で勝利を勝ち取り、新しい伝統というものを我々の手でつくってきたいと思ひます。

真夏の勝利へ向かって

応援部

黒谷 智治



我々は大切な充電期間である三学期を、もちろん我々にも非はあるのだがあらぬ疑いで部活動停止という処分を受け、一時は翠巒祭の定例である「リーダー公開祭」もどうなる事かと団員一同不安が募る一方だ。だが、今年も、なんとか、やつとのことで一応の成功を収めた。

現在は間近に迫りつつある夏の高校野球応援に向け団員一丸となって練習に心血を注いでいる。第一戦は高々の模擬試験と重なって、一般生徒は不運にも応援に向かう事はできない。その分も、応援の精鋭集団である我々が頑張ろうと考えている。

我々は「勝つ」よりも「勝たせる」を目的としている。そして自分達三年生はこの野球応援が最後になってしまうという事で、受験勉強の最中、その情熱の大半を練習に傾けてきた。そしてその目的のために連日過酷な練習を積み重ね、ある面では選手達よりも苦しい状況に耐えられる精神力を今、発揮する日がやって来る。

練習に対する真面目さと根性と、そして勝利に導くのは我々だという信念と団結力を持って、高々全体をまとめ上げ、リーダーを務めさせていたと思う。そして皆で観戦し応援することによって勝利のすがすがしい気持ちを味わうため、高々のOBも在校生も一丸となって欲しい。

今年こそは皆で甲子園に行こうではないか。

空手に懸けた三年間  
空手道部

並木 弘毅



部になってまだ歴史の浅い空手道部も部員二十名以上の部活になりました。

我が校で一番伝統のある建物である講堂を使い、毎日練習に励んでおります。自分達の代になった時、顧問の鹿野先生が転任になり、技術面での指導者がいなくなつたので六十二年夏より身学館の館

長に指導をお願いして頑張ってきました。夏合宿や夏期の集中稽古を経て十月の定期戦には必勝を期して臨みましたが、試合の二日前に主将である自分が骨折してしまい3-2で負けてしまいました。本来なら一番働かなくてはいけない自分が出場できなくなつてしまいました。迷惑をかけてしまいました。

十月には高崎市民大会もありました。自分は出場できませんでしたが団体組手が三位に入賞することができました。初めての公式な試合にしてはまあまあだったと思います。

新人戦不参加のため初めての県の大会になった総体では思うような成績があげられず残念でした。団体組手は、一回戦の桐生に敗れてしまいました。このあと桐生は二位になりましたが桐生に勝つていれば自分達もベスト4はいけたと思います。また、個人組手は自分が二回戦で優勝した選手に負けたのをはじめ、皆おしい勝負をのがしてしまいました。副主将の片山がけがで攻撃ができなかったのがかわいそうでした。

口惜しさを胸に臨んだインターハイ予選では、団体組手でベスト8になったほか初めて試合に出した二年生がベスト16に残り、実りの多い大会となりました。個人型で八位になった者もいました。

自分達はインターハイ予選をもって引退となりましたが、次代の後輩達が必ず高崎高等学校空手道部の名を上げてくれるものと確信しております。 押忍



### 敗戦、そして得たもの

## 硬式テニス部

細谷 直人



我々三年生の最後の大会である総体の、そしてインターハイ予選まで終わってしまった。ついに我々の代は胸を張って先輩達へ言えるような成績を、何も残すことはできなかった……。

我々の時の部員は入部した当時、先輩達から出来がいいと言われ、得意になっていました。しかし、初めての大会である一年生大会で残した成績といえば、ベスト32にたった三人という始末。こんなはずはない、と臨んだ総体の地区予選では、ブロック決勝に残ったペアが一つだけ。続く新人戦ではシングルは勝った方でも四回戦敗退、ダブルスにおいては、ほとんどの者が日程を間違えて不戦敗、団体戦でも二回戦で敗れてしまいました。更に春になって総体の地区予選のシングルでブロック決勝に三人進んでおきながらことごとく敗れ、総体の団体では、二回戦で桐高に敗れてしまいました。本当に今思い起こしても情けない成績です。何故こんな結果になってしまったのでしょうか。たぶんそれは、練習のせいだと思います。だからといって我々は練習をしていなかった訳ではありません。冬場もしつかり練習していました。悪かった

の方法なのです。いくら時間をかけても方法が悪ければ効果はあがりません。しかしその事に気付いたのは三年の春でした。もう遅すぎたのです。

しかし我々は勝つただけに囚われていると、特にテニスのような個人競技では失いがちなものを最後まで持ち続けることができず。それは部としての連帯感です。そんなことを言っているようでは甘い、と先輩達は笑うかも知れません。たしかに我々は勝利というものを手に入れることができませんでした。しかし我々は最も大切なものを手に入れたのです。助け合う心、そして友情を。

### まとまりの大切さ

## バレー部

町田 記寛



バレーというスポーツは、個人個人が小粒であっても、まとまりさえすれば、想像以上の強さを生じます。試合の流れ

をつかむことが容易となるからです。練習時間が少ない僕達がこのまとまりを得ることは困難な事でした。これに欠けたために、勝てる試合を落とすこともあります。しかし、みんなが一丸となった時は、強豪チームにもひけをとらないほどのチームにも成り得たのです。今年のチームの戦績は決して悪いものではありませんでした。秋季大会は、高

高にとつて久々のベスト4、新人大会ベスト8、県総体ベスト8、そして僕達三年生最後の大会となったインターハイ予選では、強豪高崎商業を破り、再びベスト4となることができました。

もちろんこんな成績で満足してはいけません。後輩にはもっと上を狙ってほしいと思います。我がバレー部にも先輩方が築き上げて来た立派な伝統があります。これを絶やしてはならないと思います。もちろん後輩には期待しています。がんばってくれると思います。それが僕が望むことは、まとまりです。個人の技術の向上よりもまずまとまって欲しいと思います。そうすれば、優勝争いに加わることも可能となるでしょう。彼らならきっと期待に答えてくれると思います。そのためにも先輩方の良き御指導をよろしくお願いします。

### 弓と道

## 弓道部

中曾根貞明



今年はやつと念願の道場が建てられ、心はずでに全国大会！というところがすが、実力がともなわないのが現状です。というのも、弓道場には屋根がない、と



言ってしまったのはそれまでですが、やはり、その影響は大きく、このごろ一人一人の自覚というものがなくなっているのは確かです。

しかしもちろん、全てが全て、自覚のない部というわけではありません。我々弓道部は、「やる気」というものを持ち合わせさえすれば、どんな運動部にも負けない練習時間と熱気が実力を引き出すことができるのです。実際、部員は皆確実に力は伸びてきています。

初めに道場に屋根がないための弱みは他にもあります。まずは、以前までは、市営の城南弓道場で一般の先生方と共に練習に励んでいたのが、一般の方々の教えというものが、他の校にはない、有利なところがありました。教えを受けられなくなった今、なんとか対策を考えています。そしてなんと「練習の成非は天候の思うがまま」ということで、風が少し強くふけば、もう大変というありさま、まして雨など降ろうものなら、もう道場を退却せざるをえない。特に梅雨時は一週間も二週間も弓の引けない時があります。この対策としては、もう学校側に屋根を取りつけさせるしかない。そしてそうさせるには何としても大会で好成績を残すしかない、という考えに到達しました。今これが最大の目的です。最後に一つ、弓道は「道」です。もしこの道に反すれば、弓はその道を閉ざしてしまう。しかし、道を自覚し、精神を鍛練したとき、道は己ずとその道を開き広げて行くことでしょう。

### 先輩、頑張ってます

現役の抱負 その3

#### バスケット部

上原 由充



この2年間、我がバスケット部の成績はあまり思わしくない。八十七年に関東大会に出場して以来、県でベスト8にも入

れないという状態がつづいている。そして今年の五月の県総体でも、ベスト16には勝ち残ったのだが、力及ばず、ベスト8の壁を破ることは、とうとうできなかつたのである。

そのとき、心の底から痛感したのは、チームの各人の個人の力のなき、つまり一人一人が、ある程度自分一人でプレイをする、ということができなく、それ故にフォーメーションにばかりたよりすぎってしまったということである。先輩方が

つくり上げてきたフォーメーションは、とてもすばらしいものばかりだが、それほどにたよってはいけなく、それを基盤として、自分達のプレイというものを創造していかなくてはならないのではないかと思う。

この「創造力」が、バスケットボールではとくに重要ではないかと僕は思う。僕達と共に練習し、共に試合をし、共に勝った喜びや負けたくやしさを味わってきた後輩達には、こういう点をよく考え、より一層練習にはげみ、高崎高校バスケットボール部の伝統の復活を目標としてがんばってもらいたい。

#### 勝利を目指して

#### 陸上部

佐伯 和彦



陸上競技は、個人競技であり、自らの力を信じるしかありません。が、練習の時は違います。部員内で刺激し合い、気持ちを盛り上げ、自らを追い込んでいくのです。

例えば、三〇〇M走る者がいれば、皆で励まし合い、四〇〇M走っている者の姿を見て、共感を覚え自分もいっしょに走りたくなりダッシュの数を一本増やしてみるというようなことであります。こうして、厳しい練習も、より楽しく行い、時には冗談も飛び交います。友達と

の会話などから、リラクセスしたムードを作り、適度の緊張感をもって、試合に望めるわけでありませう。これは、大切なことであると思います。又、それができるのが、高々陸上部であります。

その成果があつてか、今年の総体では四〇〇MRで好記録の三位入賞を果たしました。しかし、インターハイ出場をかけた北関東大会では、無念のバトンパス失敗でした。くやしきは隠し切れないものがありました。

そこで、我々三年生に残された唯一の大会である学校対抗に、このくやしき、又、昨年惜しくも一部昇格を逃がしたくやしさをぶつけ、今年は、優勝で一部昇格を果たしたいと思ひます。

#### 一瞬にかける

#### 卓球部

牧野 寛



平成元年県総体は団体戦ベスト16という、不本意な成績に終わった。また個人戦では、ベスト8は確実と思われていた。選手がベスト16にも入ることができなかつた。

これらの敗因は練習不足などいろいろあげることができるが、一つに勝負にかける「集中力」の不足があるのではないかと思う。試合はもちろん練習にしても、一個の白球にどれだけ集中できるかによ

って結果はまるでちがってくる。卓球というスポーツは個人競技であるため、誰にもたよるわけもいかず、自分だけが頼みの綱というわけで、相当のプレッシャーがかかる。そんな中で一番の敵は自分自身である。その自分に勝って始めて本当の敵に勝てるのである。日々その為の練習をしてきたつもりであるが、負けは負けである。また心を新たに練習に励まなければならぬ。

昨年九月の新人戦では団体でベスト8、個人でもベスト8というまずまずの成績で、幸先のよいスタートをきつたが、それからどうものびない。そのような現状を打破すべく、練習試合をこれまで以上にとり入れた。その結果得たものは大きかった。ベスト4の常連である中之条に接戦の結果、勝つたのである。これは部員にベスト4への期望をもたせ、これまでに以上に部活に熱が入った。事実だれもがベスト4への道が一步近づいたと思つた。しかしそうそう期待通りになるわけもなく、ベスト4どころかベスト8までも入ることはできなかった。しかし、部員一丸となつてそれぞれ頑張つたと僕は自負している。

これからは氣力、体力ともに充実させ後輩諸君にはより一層の努力をして欲しいと思ひます。



### 関東大会を目指して

## スキー部

平野 俊哉



我々スキー部の活動は、もちろん冬である。夏や他の季節もいろいろ活動するが、メインはやはり冬である。それゆえ

三年は翠巒祭頃にはほとんど引退し、主力は、一、二年である。

僕たち三年は、目標を「関東大会出場」とし、目標を達成すべく冬合宿も行い、希望とちよびりの自信を持って関東予選に臨んだ。しかし結果は、とても満足できるものではなかった。今年、実力のある選手が多数いただけにとても残念だ。

インターハイ予選、県新人戦、県春季大会や一般の大会などで上位進出もあるのですが、これからのスキー部に期待をしてほしいと思う。

私事になってしまいが、私も「競技スキー」にあこがれ、それに魅了されてきた。みんなもそうであると思う。しかし、自分達があまり活躍できなかった。その分後輩達に頑張ってもらいたいと思う。そうして、高崎高校スキー部の伝統を築きあげていってもらいたい。

### 「気」を練る

## 剣道部

小淵 繁



我々剣道部は、県ベスト4を目指し、毎日練習にはげんできた。練習は短い時間で、集中的な練習、密度の高い練習とい

うような方法をとっている。また、去年から新しいコーチがきてくれるようになり、我々の練習はよりいっそう気迫がこもるようになってきた。

今、剣道はスポーツ化し、真の武道としての道が忘れさられている。武道とは自らの「気」を練り、己の精神状態を極限にまで高めるものである。その昔、宮本武蔵は、飛ぶ鳥を気合一喝で落としたという。我々は、その武道の真髄を目ざし、常に自分の「気」を練るといふ心構えで生活している。その成果により、我々は、目先の勝敗などにはこだわらぬ、泰然自若たる心境にまで到達した。

総体は、二回戦で負けはしたが、この不動の精神力はこれからの我々の生活により充実したものにしてけると確信するものである。

### 0からの始まり

## 軟式野球同好会

丸山 哲夫



我々の同好会は、六十三年の夏に初めて高体連の大会に出場し、長年の先輩達の夢であった公式戦一勝を成し遂げまし

た。この夢が実現されるまでには、数々の努力や苦労がありました。それまで他校との試合を禁止されていたチームには顧問の先生もなく、専ら社会人との試合を行っていました。しかし、約一年間の学校側との交渉の結果、軟式野球同好会が誕生したのです。そして我々は、その「先駆者」として立ち上がったのです。顧問には染谷先生（現在榛名高校）とい

うすばらしい先生がつかまりました。先生は部費も交通費もない僕達をいろいろな面から支えてくれ、毎日一緒に汗を流し、公式戦一勝を誰よりも喜んでくださいました。そんな協力もあって現在我々は、県の優勝候補の一つとして、新聞などにとりあげられています。

練習は週三回、市に河川敷のグラウンドをかりて、主に「野球を楽しむ」という観点から行っています。またボール・バットなどは、お金を出し合って購入しています。現在会員四十六人、この全員が、同好会から部への昇格を強く願い、少しでもよい成績をあげようと必死に練習し

ています。又、今年から、定期戦においても、軟式野球が導入されることになり、その点でも燃えています。これから軟式野球同好会の歴史が、築かれていくわけですが、我々会員は、その先駆者として、その展望を強く願っています。

### 昭和63年〜平成元年 高々運動部活動状況

#### ◇柔道部

インターハイ予選

(団体)

高々 3-1 富岡 (1回戦)

高々 0-4 前商 (2回戦)

(個人)

清塚 誠 (2回戦)

長谷川亮 (3回戦)

丸橋信行 (2回戦)

新人大会

(団体) 点取 (2回戦)

勝抜 (2回戦)

(個人)

長谷川亮 (4回戦)

丸橋信行 (2回戦)

県総体

(団体)

高々 3-1 沼田 (1回戦)

高々 0-4 育英 (2回戦)

(個人)

田村 豊 (2回戦)

丸橋信行 (2回戦)

昭和63年〜平成元年度 高々運動部活動状況

◇バレー部

インターハイ予選

第1・2・3回戦シード

高々 2-0 前橋育英 (4回戦)

高々 1-2 高崎北 準々決勝

新人大会

第1回戦シード

高々 2-0 前橋東 (2回戦)

高々 2-0 桐生工 (3回戦)

高々 0-2 太田東 準々決勝

県総体

第1・2・3回戦シード

高々 2-1 渋川 (4回戦)

高々 0-2 前橋商 準々決勝

西毛地区大会

第1回戦シード

高々 2-0 富岡 準々決勝

高々 2-0 中央 準決勝

高々 不戦勝 農二 決勝

竹田杯秋季大会

第1・2・3回戦シード

高々 2-0 太田工 (4回戦)

高々 2-0 桐生 準々決勝

高々 0-2 高崎北 準決勝

◇スキー部

インターハイ予選

インハイにはとどかないが上位進出

春季大会

丸山哲夫 S L 8位

平野俊哉 S L 23位

◇野球部

春 3回戦  
夏 1回戦

◇軟式野球同好会

インターハイ予選

高々 3-2 長野原 (1回戦)

高々 1-6 館林 (2回戦)

新人大会

高々 1-3 桐生工 (1回戦)

県総体

高々 3-0 前橋南 (2回戦)

高々 0-1 前橋工 準々決勝

◇ラグビー部

インターハイ予選

高々 30-10 前工

高々 6-3 太田

高々 4-32 高商

新人大会

高々 10-0 前商 (2回戦)

一年生大会

高々 0-10 農二 決勝

県総体

高々 18-0 前東 (1回戦)

高々 78-0 渋川 (2回戦)

高々 15-14 藤高 (3回戦)

高々 0-62 農二 準決勝

元年総体予選

高々 13-19 藤高 準々決勝

◇陸上部

インターハイ予選

4×100 M R

秋永成信 4位

千五百 M 因直輝 3位

新人大会

走高跳 石橋修 5位

走高跳 石川恭弥 5位

400 M H 新井睦己 6位

4×100 M R

走幅跳 佐伯和彦 5位

三段跳 石橋修 6位

県総体

4×100 M R 佐伯和彦 3位

走幅跳 佐伯和彦 5位

関東大会

4×100 R 出場

走幅跳 佐伯和彦

◇バスケット部

インターハイ予選

新人大会 (1回戦)

県総体 (2回戦)

西毛地区大会 ベスト16 (4回戦)

強化大会Bブロック 3位 (準決勝)

◇山岳部

県総体 8位

合計 78.8 / 100

昭和63年度 第32回関東大会出場

◇剣道部

インターハイ予選

1回戦シード

高々 3-0 関学 (2回戦)

高々 3-2 樹徳 (3回戦)

高々 0-5 前橋商 準々決勝

新人大会

1回戦シード

高々 1-3 常磐 (2回戦)

県総体

高崎 5-0 桐生 (1回戦)

高々 1-3 渋川 (2回戦)

S 63県下高等学校対抗剣道選手権大会

1回戦シード

高々 2-2 常磐 (2回戦)

高々 2-1 藤岡 (3回戦)

高々 0-4 高崎商 準々決勝

◇弓道部

県総体

予選6位通過

決勝10位

◇空手道部

インターハイ予選

(個人組手)

新井 3回戦進出

県総体 (個人組手)

並木・多胡 3回戦進出

片山・江原 2回戦進出

(個人型)

阿部 11位

63年市民大会

(団体組手) 3位

# OB会の活動(1)「翠巒クラブ活躍中」

— バレーボール部

OB会 —

菊地 俊哉

(78回)

現役時代に全国大会へ出場したメンバーを中心に、バレー部の若手OBで、昭和六十年に結成されたのが翠巒クラブです。翠巒クラブは、「自分達で体を動かし、まだプレーを続けてバレーボールを楽しむ。」「後輩達と一緒にプレーすることによって何らかのバックアップをしよう」という主旨で結成されました。そして、現在県内で行われている六人制の三つの大会、全日本クラブカップ男子選手権大会・国体予選・県総合選手権大会に出場して活躍しています。

その中でも、全日本クラブカップ男子選手権大会へは、今年度も含め四年連続四回日の出場を勝ち取りました。この大会に出場して最も印象に残っているのは、初出場を果たした昭和六十一年度の大会です。この前年度にチームが結成され、県予選初出場・初優勝を狙って大会に臨みましたが、決勝で桐商クラブに破れて二位に甘んじました。そしてこの年、「全国大会出場」という合言葉のもと、チームは一丸となり、決勝で前年度同様桐商

クラブと対戦しましたが、終始リードを保ち2-0で圧勝。前年度の借りを返して初優勝を遂げることができました。

八月、全日本クラブカップ男子選手権大会は奈良県で開催されました。猛暑で体育館の中が蒸し風呂のようで、開会式に参加しただけでユニフォームが汗でびっしょりになったのは驚きました。予選グループ戦で優勝候補の一角、東京教員(東京代表)と対戦、0-2で敗れましたが、岩国クラブ(山口代表)を2-0で破り、決勝トーナメントへ駒を進めました。抽選によって、一回戦は不戦勝、二回戦で前年度この大会で上位に進出している島根クラブ、ここに勝ち進むと三回戦は予選グループ戦のときに力を出す以前にやられてしまった東京教員と対戦することになりました。再び東京教員と対戦できるチャンスが得られ、メンバー全員が最高の組合せと燃えました。

我々翠巒クラブの持ち味は、とにかくボールをコートに落さない粘り強いレシーブが身上。両エースが一七〇cmと一七二cmという小ささですがスピードとテクニクは抜群で多彩なコンビネーションバレーで攻撃するのが得意。しかも一人一人が個性豊かでのびのびとプレーしているチームなのです。

猛暑の中、島根クラブとの試合が始まりましたが、さすがに上位に進出した曲

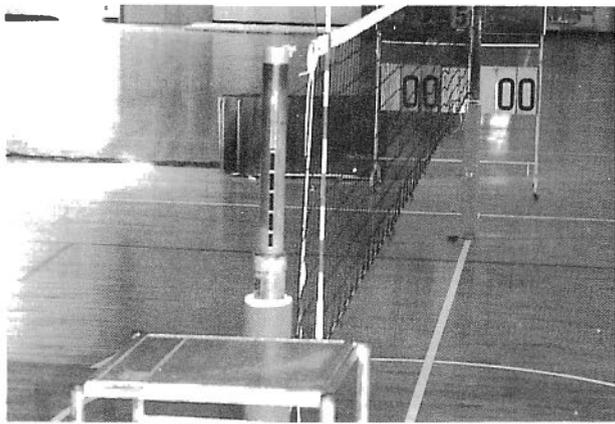
者。一回戦とは全く違ったパターンで攻めてきました。一セット目を落とし、二セット目は接戦の末取り返し、いよいよ三セット目。このとき他の二コートはすでに試合が終り、残っているのは我々のコートだけでした。でも会場は寂しくなるところか他のチームの選手や役員の視線が集まり、熱気を帯びてきたのです。舞台の出来上がったコートに気分を良くした我々は、拾っては素早い攻撃で切り返しコートの中を縦横無尽に走り回り島根クラブを翻弄。最後は小さなエースが

ライトからスパイクを決めて勝利をつかみました。この瞬間、会場が温かい拍手で包まれました。必死に闘った両チームへの心のこもった拍手でした。本当に嬉しく、心の中にグッとくるものがあるような感動でした。

翌日、宿敵東京教員と一時間以上の試合を展開しましたが、東京教員の高さには勝てず、翠巒バレーを随所に発揮したものの、玉砕した形になってしまいました。大会が終了して、全国のバレーボールと親睦が深められ、役員の方々の思いやりを感じ、本当に有意義な大会だったとメンバー全員が思いました。それからというもの、この大会だけは何としても県予選を突破して出場しようというハッスルしているわけです。

チーム結成当時のメンバーも年齢と共に次第に動きがぶくぶり、年々優勝するのが難しくなってきたのでありますが、今年には新戦力が加わり新しい風が入り込んでチームの中に活気ができています。本当にバレーボールを愛する仲間です。一緒に同じ目標に向かって努力することができるといことは素晴らしいことだと思います。高々時代、年代は離れていても同じコートで練習した先輩・後輩がチームメイトとなつて翠巒を胸につけて全国大会で活躍できる喜び。さらに、バレーボールを通じてつくられた素晴らしい人間関係に感謝したいと思えます。

翠巒クラブは、さらに前進できるように努力していきたいと思えます。また、全国へ出場するメンバーの力を、現役の選手達に利用してほしいと思います。そして、再び高崎高校バレー部が、全国大会という大舞台で大暴れしてくれることを期待しています。



# OB会の活動 (2)

## 平成元年度 現況報告

### 第五回 翠巒体育会

#### ゴルフ大会

##### 卓球部初優勝

第五回翠巒ゴルフ大会が月夜野カントリーで十月六日(木)催されました。当日はあいにくの霧の為午前七時まで、関越道の赤城ー沼田間が閉鎖され、到着の遅れた人が続出しました。

コースも霧の為と、日没まで全員プレーの修了は無理ということで、ハーフで打ち切られました。結果は、常勝の柔道部に変わって、卓球部が根岸・山口さん等の活躍で初優勝しました。柔道部は低調で四位でした。個人では野球部の小林均さんが優勝。ベスグロは卓球部の根岸さんでした。

#### 第五回翠巒体育会ゴルフ大会

(月夜野カントリー)

昭和六十三年十月六日(木)

#### ▽団体戦

- ①卓球部   グロストータル   一七四
- ②野球部   〃                           一八〇
- ③サッカー部   〃                           一八四

#### ▽個人戦

- ①小林   均 (野球)
- ②本多   饒 (野球)
- ③藤原   陸男 (柔道)
- ▽ベスト・グロス
- ①根岸   博昭 (卓球)
- ②山口   正敏 (卓球)

42 38



### バスケット部

小澤 武男 (57回)

#### 清水貞保先生の祝賀会を開く

バスケット部の恩師、清水貞保先生の喜寿及び県功労賞受賞祝賀会が平成元年一月二十八日(土) 高高同窓会終了後、高崎ビューホテルで盛大に開催され五〇余名のOB諸兄が集まり清水先生の長寿と受賞をお祝いしました。

当日は、OB諸兄の中には県外から駆け付けた人や卒業後二〇〜三〇年ぶりに再会した人、又、先生が相変わらずのポテ頭で若々しさを保っていられるためどちらが先生だか判らなくなった人・・・等、たくさん懐かしい教え子に囲まれ記念品贈呈の際には先生が感極まり思わず流涙される一場面もあり感動の集まりでした。

清水先生ノ「いつまでもお元気で丈夫でいて下さい」それが我々の喜びと願いですから。

### サッカー部

清野 哲雄 (74回)

#### 「群馬リーグ二部昇格！」

近年のサッカーの変貌には著しいものがあり、我々OBもこの波の中船に乗っていないかなければならない由縁があります。

現役サッカー部への指導と支援、そしてOB会チーム「翠巒サッカークラブ」の堅持と会員相互親睦が、常に最大テーマだからです。

翠巒クラブは、群馬県サッカーリーグ三部に登録して十七年目になりますが、今季より四部制導入という厳しい状況の中、前会長五十期国峯善次郎氏、会長五十八期佐藤義夫氏のもと、永年に亘る会員の御尽力により、見事念願の三部リーグ優勝を成し、来季二部リーグへの昇格を決定致しました。一重に会員のみならず、学校・翠巒体育会・顧問・関係諸兄・現役の御助力と感謝いたします。

また、OB会は第三回ゴルフコンペを成功し、恒例の初蹴会、新年会、納涼会などの事業を開催し、その他新しい活動も計画しています。特に新年会には、会



員の家族を招き、一緒に新年の祝を喜び合うように始め二年目を迎えようとしています。会員のみならず、家族・家庭の御理解と御助力そして親睦が、縦横奥へと増々広がって来ています。きつとサッカー部OB会が、素晴らし「絆」の会となる様にと切に願っています。

### バレー部

安中 隆一 (65回)

しばらく集まりのなかったOB会が、今年バレー部の合宿に合わせ、翠巒会館で総会を行いました。総会後は現役との親善試合などで楽しい一時を過ごしました。

片野OB会長から下村OB会長へバトントッチもなされ、今後のOB会の活動について活発に話し合いがなされました。住所録の整備、現役への応援体制、活躍中の翠巒クラブへの支援などが議題になりました。OB会総会の定例化、現役への支援体制の確立、懇親会の開催など、下村会長のもとに活動を活発にしていきたいと考えています。

### ラグビー部

木村 洋 (59回)

平成元年度三月十二日

六時より高崎駅東口サンガムにて役員会

平成元年五月十三日

六時三〇分より前記サンガムにて役員会

平成元年六月十一日

前橋高校ラグビー部創部六〇年記念行事にOB、現役共に招待を受け参加する。

十二時キックオフにより現役の試合終了後、OB二〇歳未満、三〇才未満、四〇代以上の三試合を行いました。又、五時より前橋商工会議所会館で記念パーティーに当高崎高校OB会会長初め多数参加致しました。

平成元年八月六日

現役菅平合宿激励

(OB会より強化費支給)

### 水泳部

永尾 俊弘 (70回)

水泳部OB会の平成元年度の活動状況その他を、簡単ではありますが、この紙面をお借りして御報告申し上げます。

昭和六十三年十二月、定例のOB会総会を行い、会長に小茂田猛(66期卒業)、副会長に筆者(70期卒業)、小見忠司(73期卒業)を選出いたしました。昭和六十三年四月十二日に御逝去された前OB会会長・多胡吉明氏と因縁浅からぬ恒例のゴルフ大会は、七月四日ロイヤルオークカントリークラブで、御息等の参加をえて盛大に行われました。水泳部も創部以来長い歴史を重ね、OBたちの年齢構成もより一層幅広いものとなりました。

以前は、仕事の都合等で参加できず、半ば伝説と化していた諸先輩も、近年はOB会に参加されるようになり、OB会席上の話題もより一層豊富なものとなりました。新旧OB間の連絡を密とし、水泳部OB会より一層の発展をはかってゆきたいと会長以下一同、切に願っております。

### 卓球部

角倉 信久 (69回)

卓球部OB会は現在、現役卓球部の援助をはじめとし、OB卓球大会および練習会、新年会、卓球部OBゴルフコンペ、翠巒体育会ゴルフコンペ参加等の活動を行っています。

翠巒体育会名簿発行を機会に、連絡を密にし、OB会活動を盛りあげています。

### 軟式庭球部

丸山 博 (68回)

数年の間活動らしい活動をしてなかったのですが、六十二年・平成元年と、盆の土曜日の午後に現役との交流テニスの会を行うようになりました。夜には長谷川ホテルで懇親会をし、旧交を暖めました。出席は延五十名程ですが、在京のOBもかけつけて、若人とのゲームを楽しみました。

現在、県大会の上位者に若手OBの数名が顔を見せており、これからの活躍が

期待されます。

勝俣会長(52回)を中心としてOB会の体制も整い、これからもOB同士の交流と、現役の応援を行っていきたく考えています。

### 応援部

丸山 功一 (60回)

応援部総会並びに親睦会を本年三月十八日(土)ホテルスワで行いました。

活動状況の発表、会計報告の後、役員改選を行い、前役員全員留任、会長・丸山(60回卒)、副会長・荒木厚生(60回卒)、副会長・秋山賢治(74回卒)、会計・斎藤宏明(60回卒)となりました。もう少しOB会の活動を活発にする為、各期毎の連絡を密にとりあうことを確認しました。又、現役との交流を持ちたいという事で、後日何か催しを行うことを確認しました。総会后、懇親会に移りました。今回は藤井正弘君(81回卒)が卒業したの若いOBを沢山参加させてくれたので、大変若々しく盛り上がった宴会(特に二次会で)となりました。今後は応援部OB会も若手を中心に現役に近い年の人も参加しやすいような会に発展させなければならぬと感じられました。年内に何とかゴルフ大会を催す予定です。

# 先輩、頑張ってます

## 現役の抱負 その1

### 勝利のために何をするか

#### ラグビー部

高橋 哲人



現在、我が高崎高校ラグビー部は三年七名、二年十四名、一年十八名という、ラグビーチームとしては、非常に少ない人数で練習を行っています。特に三年生が七名しかいないことは、大きなハンデになっています。しかし、練習内容の充実、チームワーク、各自の自覚など、いろいろな努力によりそれを克服し、春の総体では、三位になることができました。

県下では現在、農二の台頭が著しく、この数年の花園出場は、全て農二のものとなっています。勝利し、花園に行くためにはどうすればよいか？根性か？気迫か？集中力か？どれでもありません。精

神論で勝てる時代はとつくに終わっています。根性で勝てるのなら、どのチームも勝つ自信はあるでしょう。

重要なのは、勝利のために何をするか考え、それを実行していく姿勢だと思えます。その中で、顧問の先生やOBの方々の助言を受け、修整心で強くなっているのだと思います。

これから夏にかけて、菅平合宿などで全国的なレベルでの試合ができ、チームの力を伸ばすチャンスです。秋の花園を賭けた戦いまでに、農二に食いきがるほどの力をつけ、花園出場の悲願を達成したいと思います。

### 変革期

#### 山岳部

樋田 征樹



現在、山岳部は総体、夏合宿、冬合宿などを中心に岩登りや雪山も含めて年間十〜二十回程度の山行を行っています。

これらの山行は、部員の考えを重視してくださる顧問の先生方のおかげで、殆どが部員が自分達で計画したものであります。この山岳部が現在変革期にあります。

まず、来年から昨年まで参加していた高体連のリーダー講習会に変わって、自分達だけで計画する春合宿が予定されています。これは残雪期の山で行うことが

予定されているために、今年は準備段階として、日帰りで三回残雪期の山へ出掛けて春山における技術や心構えなどについて勉強してきました。春合宿が来年度功すれば山岳部の活動がレベルアップしたことになると思います。

また、高校総体に対する取り組み方も四年程前から変わってきて、順位も四年間、9↓11↓7↓8と入賞ライン前後で安定してきていて、昨年は高々の運動部が不振のなかで山岳部として八年ぶりに関東大会に出場を果たせました。

また、ここ数年あまりなかったOBの合宿などへの参加も卒業間もないOBを中心に増えてきたことは喜ばしいことであると思います。卒業後、山をやめてしまいう人が多く中で再び合宿に参加してくれる人がいることは、現役部員にとって大変強い存在であります。

この他にもいくつかの点で山岳部は変革期にあります。これらの変革は山岳部にとって必ずプラスの方へ働くものであると確信しています。

### 勝利への執着心

#### 野球部

清塚 哲也



今年の春、一年生が十九人も入部して、三年十六人、二年十三人、合計四十八人という大所帯となった。

しかし、成績はと言うと、秋、二回戦、春は三回戦と敗退してしまつた。

一昨年、三季連続ベスト4を成し遂げて以来、ベスト8から遠ざかっている。なんとしても最後の夏にベスト8、そして、初の甲子園に行こうと、四十八人が力を合わせて頑張っている。

特に今年は、これといった強豪チームもなく、どこの高校も甲子園を狙える状態にある。春季大会での、屈辱のワールド負けのあと、各自が課題を持ち、守備を中心に一段と厳しい練習に取り組んできた。

その結果、練習試合でも、強豪とされているチームに勝ってきている。その好結果として現れてきた原因としては、まず投手力が安定してきた事、内野のミスがなくなってきた事、そして、勝利に対する執着心がでてきた事が挙げられる。もともと、そんなに力のあるチームではないので、勝利に対する執着心がなくなつてしまえば、あたりまえのチームになつてしまう。常に勝利への執着心を持ち続けてプレーすることが、甲子園への道につながると思う。

特に、今年のチームはOBの方々、支えられている面が多いので、その恩返しにも、初の甲子園への切符を手に入れたいと思う。

現在、チーム状態は絶好調、あとは、小林監督を信じ、思いきりプレーするだけ、そうすれば、初の甲子園が見えてくるだろう。

『翠巒よ 響け真夏の甲子園に』

# 高々に神風吹きて、二連敗の仇を討つ

「〇毛そりませぬ」の一言が高々生を発狂させたのであろうか。十月五日の第四十三回定期戦にて、我が高々は宿敵前高を下し、見事二連敗から脱することに成功した。冷静に考えるに、今年の場合、例年通りの定期戦ではなかったと思われる。何故かと言えば、今年の定期戦には重大な責任が課せられていたからである。その責任とは、つまり、「三連敗阻止」のことである。三年生は、三連敗した時点で負け越しが決定し、今年また負けたなら、勝ち知らずで卒業するところであった。(今年に勝ったが)もし、三連敗すると在校の高々生で定期戦での勝利の喜びを知る者が不在になり、「定期戦なんか、どうでもいいや」といった風潮——つまり、無気力な高々生が増加する可能性があったのである。今年の実行委員が最も苦労した点は恐らくこの「無気力」であったろう。定期戦当日までに、校内において無気力の風潮が広まることはとても危険なことである。今年もそうだった風潮が確かにあったが、幸い全校に拡大することがなかった。これが今年の勝利に結びついたと思われる。

## 快心の一撃!!

## 高・前定期戦

第41回 得点集計表 (昭和62年度)

総 合	小 計	空 手	弓 道	硬 式 庭 球	野 球	剣 道	柔 道	サ ッ カ ー	ラ グ ビ ー	ソ フ ト ボ ー ル	水 泳	球 入 れ	綱 引 き	駅 伝	卓 球	軟 式 庭 球	バ レ ー ボ ー ル	バ ス ケ ッ ト	陸 上	競技種目		
																				一般	高々	
× 負	77	41								3	6	0	3	0	5	6	8	4	6	6	一般	高々
		36	6	6	6	0	0	0	0	6					0	6	6	6	0	0	部	
○ 勝	91	49								6	3	9	6	9	4	3	1	5	3	3	一般	前高
		42	0	0	0	6	6	6	6	0					6	0	0	0	6	6	部	

第42回 得点集計表 (昭和63年度)

総 合	小 計	空 手	弓 道	硬 式 庭 球	野 球	剣 道	柔 道	サ ッ カ ー	ラ グ ビ ー	ソ フ ト ボ ー ル	水 泳	球 入 れ	綱 引 き	駅 伝	卓 球	軟 式 庭 球	バ レ ー ボ ー ル	バ ス ケ ッ ト	陸 上	競技種目		
																				一般	高々	
× 負	67	37								0	6	3	3	0	4	9	7	2	3	3	一般	高々
		30	0	6	6	0	0	6	6	0					0	6	0	0	0	0	部	
○ 勝	101	53								9	3	6	6	9	5	0	2	7	6	6	一部	前高
		48	6	0	0	6	6	0	0	6					6	0	6	6	6	6	部	

第43回 得点集計表 (平成元年度)

総 合	小 計	軟 式 野 球	弓 道	空 手	硬 式 庭 球	野 球	剣 道	柔 道	サ ッ カ ー	ラ グ ビ ー	ソ フ ト ボ ー ル	水 泳	球 入 れ	綱 引 き	駅 伝	卓 球	軟 式 庭 球	バ レ ー ボ ー ル	バ ス ケ ッ ト	陸 上	競技種目	
																					一般	高々
○ 勝	91.5	46.5									7.5	6	6	3	0	0	9	4	5	6	一般	高々
		45	0	6	6	6	3	0	6	0	0					6	6	0	6	0	部	
× 負	82.5	43.5									1.5	3	3	6	9	9	0	5	4	3	一般	前高
		39	6	0	0	0	3	6	0	6	6					0	0	6	0	6	部	

翠巒体育会役員名簿 (平成元・十二・五)

剣道	柔道	水泳	サッカー	ラグビー	バレー	バスケット	軟式庭球	卓球	陸上	顧問	会計監査	庶務	庶務	庶務	庶務	庶務	庶務	副会長(事業)	会長																	
吉野 宏一	関口 茂樹	石井 清一	小此木 勝	原野 勝弘	赤羽 英光	清野 哲雄	設楽 嘉男	深沢 岩吉	安部 基彦	下村 幹實	林友松 敬三	丸山 芳之	根岸 博昭	深沢 信男	横尾 成幸	竹内 幸	岩田 武雄	山口 正敏	秋池 宗一郎	川手 義昭	横田 義昭	塚越 章茂	小沢 武洋	木村 朝夫	東瀬 朝夫	佐藤 朝夫	安中 隆一	丸山 誠四郎	廣田 誠四郎	國峯 善次郎	清水 貞保	岡田 由重				
58	63	57	66	56	78	74	73	62	57	52	73	62	67	61	50	72	68	68	57	65	59	30	50	64	60	65	58	69	57	59	58	55	62	65	58	53
										住所										電話																
大谷 小笠原 岡田 寺町 水上 町田 富田 飯塚 原田 富田 波戸場 矢島 森形 塚田 町田 水上 川嶋 茂木 清水 今井 徳安 児島 内田 井内 岩井										運動部長 清水 敏男										学校側顧問 磯貝 福七 教頭 宮川 清																

編集後記

高々が乗附の地に移転して五十年目のメモリアルイヤーは、昭和から平成への激変の年となりました。十年後は西暦二〇〇〇年、新たな世紀へ向かう高々運動部の活躍を、私達も応援したいものです。

剣道	登山	体操	野球	応援	硬式庭球	弓道	スキー・スケート	空手道	軟式野球	マラソン同好会	編集部長	事務局局長											
林 正行	藤名 正誠	清水 正誠	森田 忠義	井上 安平	小山 潤一郎	秋山 賢治	荒木 厚生	小林 俊之	大崎 哲朗	田中 哲朗	富田 裕二	川嶋 尚武											
68	69	69	46	59	77	69	74	60	77	50	76	60											
住所												電話											
上野 臣吾												学校側顧問 藤原 正泰 篠原 威宏 大森 威宏 田端 中 小川 俊之 石沢 信久 池之上 昭義 島田 要 武井 茂雄 飯塚 光 矢島 哲 五十嵐 誠一 西須 善文 高山 秀夫 佐藤 寛 真藤 熙 大谷 芳夫 富田 裕二 山本 法明 井上 竜哉 内田 昭弘 増田 健 飯野 良二											

翠巒体育 第十一号  
平成元年十二月十二日発行  
翠巒体育会事務局  
〒三七〇 高崎市八千代町二一四一  
群馬県立高崎高等学校内  
電話 〇二七三(二四)〇〇七四  
印刷 (有)オーサキ